

4月21日 卒業

教師に成り立ての頃。とにかく手を焼く生徒がいた。

当時、定時制高校は中学卒業後職を得て、働きながら学ぶ生徒がほとんどだった。Sも例に漏れず造園業で働きながら学校に通っていた。仕事の都合で休んだり、遅れてきたりすることもしばしば。授業にも集中できず、板書しているうちに立ち歩くこともしょっちゅうだった。「こら、S、座っとかんかい」と私が怒鳴る度、「先生ごめん」と舌を出す。そんな繰り返しだった。気に入らないことがあると言葉も乱暴になり、先生方ともめることも。でも、何だか憎めない生徒だった。そんなSについて私が「学校に来て、まともに授業も受けへんし、遅刻や欠席を繰り返してる。あいつは何で学校に来るんやろう」と愚痴を言うと、そばで聞いていた年配の先生がこう言った。「学校が好きなんや。それって素晴らしいことやで」

理由は忘れてしまったが、Sはある生徒とのけんかをきっかけに、学校をやめてしまった。毎日のような私との掛け合いがなくなり、教室は火が消えたようだった。

その学年が卒業するとき、Sがひょっこりと学校に現れた。

「先生、俺一人前の庭師になったんやで。〇〇公園の敷石は、全部俺が敷いたんや」誇らしげに私に話しながら、突然声を詰まらせて「先生、俺ほんまは、あいつらと一緒に卒業したかったんや」と大粒の涙を流した。

あのときの先生の言葉の意味が、そのときわかった気がした。

